

**阿州藍屋奥村家文書 全五巻  
藍住町教育委員会編 1986～91**

藍住町教育委員会編  
藍住町(徳島) 編者 1986・87・89・90・91  
201p・437p・161p・195p・172p 22cm 非売

江戸時代、徳島藩主蜂須賀氏による葉藍栽培の奨励・保護のもと、「阿波藍」として優れた藍玉が全国に送り出されたことをご存知だろうか。本書は、その中心地である吉野川中・下流域で藍師・藍商として成長をとげた徳島県藍住町奥村家の10万点余の古文書について、目録と史料（翻刻）を収載した調査報告書である。

本書解説によると奥村家は、近世後期の藍師としての堅実な経営を基礎に、土地集積、藍玉の売場株取得、廻船業・肥料商・酒造業の開始、徳島支店と東京支店(現江東区佐賀)開設をおこなって、19世紀後半に豪農として大きな成長を遂げた。1897年以降の化学染料大量輸入を契機として没落する藍商が多い中で、奥村家の経営は本源的蓄積段階の商業資本を、多角的経営で産業資本に転化し、近代

的企業経営を成功させた稀なケースと位置付けている。

さて奥村家文書は、1985年の建造物調査の際、東・西の藍寝床と南・北の土蔵から多量の古文書が発見されたことを契機に緊急に整理が進められたようだ。このため本書目録は、ほぼ一年間で整理が終了した分を主題分類項目毎に編年順で配列している。解説では経済史・経営史に重点をおいているが、全体を通覧すると私的書簡・村公文書・県会・貴族院・従軍・信仰・教育（史料）などに及んでおり、むしろ奥村家に生きた人たちの知的活動の証を地層状に見る思いがする。各巻は調査順に構成されており、第一巻は南土蔵文書群、第二巻は南土蔵書簡群、第三巻は北土蔵階下の書類棚文書群、第四巻も北土蔵階下の「帳だんす」・「大きい木箱」文書群、第五巻は「大きい木箱に釘付けされていた」文書群（場所は不記）であることが知られ、史料管理史上の脈絡が見え隠れしている。

10万点を越える文書群の保存と利用公開へ向けての努力に敬意を表しつつ、藍屋敷の構造や経営構造と文書の作成・管理史との関連解明を進められ、これらに裏付けられた文化的高みが開示されることを期待する。

保坂 裕興・学習院大学史料館